



戦後80年の広島・長崎訪問記 「自分ごととして考えよう」



K君と明も加わった原爆落下中心地碑での高校生たちの人間の鎖
明は新聞にコメントも載せてもらった (16 p掲載)

今年、終戦80年。明のクラスメートで、日本ファンのK君が夏休みに日本へ遊びに来ることになったので、一緒に広島と長崎に行くことにしました。

ドイツでは原爆については歴史の教科書に数行出てくる程度で実態は知られていません。だから明とK君は「若者が広島と長崎を訪れて平和について考え、若者向けにビデオを作成する」ということで、ハノーファー市から補助金をもらいました。

明とK君はまず長野県で高校に通い、10日間東京、3日間大阪を堪能。そして8月5日から私と一緒に広島へ向かいました。日独平和フォーラムの山本健治さんや南ドイツからのドイツ人夫妻など総勢10人で被ばく者の話を聴き、平和公園の碑巡りをしました。

原爆投下時に2歳だった山田寿美子さんは、原爆についての記憶はありません。しかし親を亡くして、たらい回しにされた親戚の家での大人たちの冷たい仕打ちには「今思い出しても屈辱的で涙がでる」と語ります。戦争は人々の体を傷つけるだけでなく、家族から引き離し、大事なものを失わせ、日常を奪ってしまうことだと感じました。「原爆のことを聞きたくないという人もいるけれど、これは現在進行形の問題。今の若者が頑張らないと将来どうなるかわからない」と警鐘を鳴らします。

長崎では、長崎人権平和資料館の園田尚弘さんや国武雅子さんのお力添えで、原爆をテーマにした演劇を作って上演している長崎南山高校演劇部や長崎大学の学生たちと討論しました。

そこでK君が「原爆を落としたアメリカに憎しみや怒りがありますか」と質問すると、生徒たちは驚いたよう。そのように考えたことがなかったからです。

「憎しみや怒りはない。原爆について伝えていく」「日本が何をしてきたか考えると、怒りは感じない」という意見が出た他「悲しを感じる。できることは何かと考える」「家族や親戚を亡く

した悲しみを曾祖父の話で知った。原爆を許してはいけない」という声がありました。

「落とされた側の視点ばかり教られてきた」という生徒もあり、原爆がどれだけ悲惨な結果をもたらしたかを強調するだけでは、世界は変わらないという現実を実感しているようでした。

原爆投下当時6歳だった城臺美彌子^{じょうたい}さんは、障害を持って生まれた孫が亡くなるという体験をするまでは、自分が被ばく者だと思っていなかったそうです。1998年にインドとパキスタンで核実験があった際に、何も知らないお母さんが赤ちゃんを抱いて実験を見物する映像を見て驚き、「核の恐ろしさを伝えなければ」と感じたそう。「孫を亡くした怒りや悲しみを力に変えたい」それが出発点でした。また森口正彦さんによる、原爆の影響で身近な人に奇形児が生まれた話も重く響きました。

8月9日は長崎南山高校の平和集會に参加しました。5、6人のグループで、平和記念像など平和のシンボルを知らない人にどう説明するかという課題に取り組みました。

全国高校生平和集會では140人が核抑止や核廃絶について議論し、明も最後にひとこと発表する機会を得ました。

今回さまざまな高校生の討論を聞き、話の要点は以下のように感じました。

平和とは…戦争がない、差別がない、いじめがない。

平和で「あること」とは…ごはんが毎日食べられること、家族や友達といられること、自由があること、教育が受けられること、家があること。そこに、城臺さんがこう付け加えました。「夜、

安心して眠れること」。

そして高校生たちが言いたいのは…

「我々は 被爆者から直接話を聞ける最後の世代」「聞いたことについて考え続ける、周りに伝えていく」「そして、核廃絶や戦争反対のために実際にどう行動に移すかだ」

だから、とにかく「戦争のこと、原爆のことを自分ごととして考えよう」「身近なところから平和は始まる。だから身近な人を大切にしよう」

また、被団協の田中照巳^{てるみ}さんがラジオで下記のように話しており、至極もつとだと思いました。

- ・ノーベル賞を被団協が受賞したのは、核兵器を使わせないという声を世界に広げるためだろう。
- ・原爆の悲劇を継承するだけでは足りない。自分で考えて行動すること。
- ・核抑止とは核兵器を持っている国は強いままで、持っていない国を強くさせない仕組み。

ロシアやイスラエルの例で、力の強いものに攻め込まれたらなすすべがないという事が明らかになり、暴力をやめ、話し合いで解決しようという人々の長年の尽力が、一瞬で無に帰してしまった。

対抗する道があるとすれば連帯しかありません。ひとりひとりは無力でも仲間をつくれば、大きいものにも立ち向かえるかもしれない。

高校生平和大使が「微力だけど無力じゃない」をモットーに、核廃絶運動をしているのはまさに理にかなっています。若い世代が真剣に取り組む姿に希望を感じました。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂